

ニューファンドランド島は、一四九七年、ジョバンニ・カボットにより発見された、北米最東端、大西洋に浮かぶ、北海道よりやや大きな島で、一四九九年、イギリスの植民地からカナダに帰属するまで、その地理的・歴史的事情から、他の北米英語圏から隔離された言語的「飛び地」であった。N島で話される英語は、必然的に、北米大陸で進行した言語的平準化を免れ、多くの古い言語形式を留め、さらにはN島独自の社会的・経済的・民俗的諸要因の影響の

ニューファンドランド島

特異な言語情況

丸田 忠雄

もとで非常にユニークな地域方言へと発展してきた。とくに海洋、気象、そして島の主産業である漁業に係わる意味領域には、多くの独自の語彙がみられ、また標準英語と共通の語に対しても独特の語義が与えられている。

この島に本格的な(季節的でない)植民が始まったのは十七世紀後半からで、移民のほとんどが南西イングランド、南西アイルランドからやってきた。現在島の人口五十万の九割以上が、こ

れらの人々の子孫である。セント・ジョーンズ市を中心とするアバロン半島には、アイルランドからの移民が多く(彼らは日本人の目から見ても一般に驚くほど小柄である)、N島北東部にはイングランドからの移民が多い。

必然的に、N島の人々が話す英語にアイルランド英語、イングランド南西部方言の明らかな特徴がみられる。これらに島独自の特徴が加わって、いわゆるN島方言が成り立っている。この他に、N島西部にはスコットランド=ゲール語やフランス語を話す少数の人びとがいる。

さらに現在は消滅してしまったが、かつてはミックマック、イヌイットなどの北米原住民、ノルマン・フレンチを話すイギリス海峡チャネル諸島人(現在人名にその名残りがみられる)も住んでいた。

このようにN島の言語的背景は複雑なのだが、あえてN島方言の最も顕著な特徴を挙げると、発音の不明瞭さ(母音を鼻音化する傾向による)と、信じられないほどの「早口」がある。

典型的なN島人のことばは、英語を母音とするカナダ本土人やアメリカ人も全く理解できず、さらには彼らの話してい

る言語が英語であることさえ感ずることができないという。彼らの舌の転がるリズムカルな音は、何か楽器のすぐれた演奏であるかのように聞こえる。

ただし、教育の普及、都市化、マスメディアの発達、交通事情の改善などの必然的な帰結として、「本当の」N島方言を話す(せる)人口は急速に少なくなってきた。この傾向は、N島人の自分たちの方言に対する態度の変化(誇り→蔑視)により、さらに拍車をかけられている。

このような情況の中で、一九八二年、カーウイン、ストーリー、ウイドウスン共編『ニューファンドランド英語辞典』(トロント大学)が出版された。これは構想から完成までに四半世紀の時間とニューファンドランド=メモリアル大学の多くの学者・学生の献身的な労力を費した、ニューファンドランド英語の語彙に関する初めての本格的な学術的集大成である。同辞典出版以前にもしばしばN島方言に関する言及はあったが、それらは共通して、カナダで経済的・文化的に最も遅れた地域の住民(今でも一割強の人が文盲)が話す「奇妙」な英語、俗に蔑視的に「ニューフィー英語」としてであった。このような中で、偏見にとらわれない純粋に学問的関心に基づく、しかも第一級の出版社からの辞典の刊行は、N島方言に対する偏見を打ち破ると同時に、N島人に自分たちの言語、さらには自分たちの存在に対する自信回復に大き

く寄与した、とカーウイン教授はいう。

だが実情はそれほど単純ではないようだ。確かに、辞典はN島以外の多くの新聞・雑誌で取り上げられ、最大級の賛辞を受けている。しかし、これらの評者は本当のN島人ではない(N島の知識人たちは、自分たちをN島人には見なしていないようだ)。彼らの書評に一樣にみられるのは、同じ島内に、同じ北米に自分たちの言語と著しく異なることばが話されていることへの驚きである。彼らのN島方言に対する視点に、何ら根本的な変化はないのである。また、海や農園で働く多くのN島人たちは、この辞典の存在さえ知らず、たとえ知っていても、「よそ者」が作った本に必ずしも好意的な目を向けているわけではないようだ。

ともあれ、『ニューファンドランド英語辞典』の出版を契機に、ニューファンドランド=メモリアル大学のN島地域研究は一段と活気を帯びてきたように思われる。民俗・言語・歴史・英語・仏語の各学科を中心に活発な研究活動がみられ、数多くの出版物が刊行されているし、昨年は各分野にまたがる学際的な学術雑誌*Newfoundland Studies*も同大学から発行され、カーウイン教授が停年をまたず退職して、専ら編集にあたっている。

(山形大学人文学部助教授、ニューファンドランド=メモリアル大学客員研究員)